富山の生物　54（2015）
富山県生物学会創立90周年特集

富山県生物学会―ここ35年の歩み―

顧問　布村　昇

富山県生物学会は菊池勘左ェ門先生が創設された前身の富山博物学会から長い伝統と輝かしい業績を刻んできた。富山県生物学会となってからも富山の生物学の進行を促し、幾多の生物学者を育成し、生物学の普及や生物教育に貢献してきた。

しかし、近年、生物学は著しい発展をみせてきた。ミクロの実験生物学が興隆し、細胞レベル、遺伝子レベル、分子レベルへと進み、大学や研究所で大掛かりな最先端の設備を用いた研究が行われるようになった。また、生態学も発展し、大規模な調査や環境測定、近代的機器を駆使したものが行われるようになった。個人や小人数の野外観察を主とするナチュラリストやアマチュアとの距離が大きくなり、生物学は一層発展するとともに細分化されてきた。一方、交通の便が良くなり、東京や全国各地、さらには海外にも容易に行けるようになり、近隣にいる会員より、もっと近いテーマの研究仲間との交流メリットが大きくなった。また、研究機関で「研究業績」が重視されるようになってこの傾向は顕著になるにつれ、地方の生物学会は衰退することが多くなってきた。地方学会より全国規模や国際規模のより近い専門家と議論を専門家との交流を行い、『研究業績』になる発表をした方が、時間も予算もそれに投入した方が明らかに有利な状況になったためであろう。

昭和53年、私が入会したころには本会はすでにこれらの問題点、生物学の最前線との乖離がある程度みられるようになっていたと思われるが、それでも多くの現役の学校の教員がメンバーにおり、若い研究者からベテランまで一人一人のテーマを持った会員が多く、エネルギーに満ちた雰囲気であったと思う。

年号が昭和から平成に変わる頃には本多啓七先生がおひとりで会誌の原稿集めや編集、観察会などの事業を一手に引き受けておられ、献身的にご活躍をなさっておられるように見えた。組織の近代化が必要であると思われたが、それを成し遂げられたのが新しく会長になられた長井真隆先生であった。長井先生はちょうど富山市科学文化センター（現富山市科学博物館）から富山大学に移られた多忙な時だったが、富山市科学文化センター学芸員が編集担当、高等学校などの先生方が行事などの事業担当、富山大学が事務局（庶務、会計）担当の三つにわけて役割の分担という大改革を実施された。この三位一体というべき組織の近代化で大きな危機が乗り越えられたと思われる。その後、時間とともに会員数や行事の参加者も少なくなり会誌への投稿も少なくなり、前述の傾向が顕著になり、その後パソコンが普及し、メールやインターネットも普及しこの傾向にますます拍車をかけかけた。

しかし、平成18年の総会の頃にはジリ貧になってきた会員数や行事参加者数の減少に「いよいよ解散か」という噂もささやかれるようになった。その時の総会で「だめならつ

ぶれてもいいという覚悟で思い切った事業に取り組んでみましょう。」と言ったのは故平内好子さんだった。彼女は「自分が副会長を引き受けるから」と私を会長に推し、役員の大幅な若返りを図った。また、参加者の少なくなった従来タイプの観察会をやめ、公開性の高い行事として有峰での公開観察会などの新しいスタイルの事業に一新した。当初は中央から青木淳一先生に講演していただくなどの思い切った事業も行った。特に、平成18年度から、県内各地の生物相を含めた自然の状況を総合的に調査・記録する事業を開始した。自然は刻々変わっていくので活字にしておくことが必要と思っていたが、当時私は博物館におり、行政やアセスメント関係、マスコミ関係などからしばしば県内の生物の状況に関するデータが多く求められていることも痛感していた。その一方、会員諸氏は県内の生物についていろいろな調査研究をしておられるのに、そのデータほとんどが会員の野帳に記されても陽の目をみないものが圧倒的に多く、もったいないと思っていた。そこで共通の地域を会員それぞれが得意分野を調査し、その結果を持ち寄り、記録に残すともに富山県の自然環境について総合的な理解を得ること、同時に共通の目標に向かって進むことで交流を深めることができるのではないか、さらに会員と地域住民との共同調査ができれば、それぞれの地域の貴重な自然環境保全に関する相互理解を図り、会のこともよく知ってもらえる機会になると考え開始した。その第１回として須河副会長からの提案で猫池を共同で調査した。続く２回目は魚津市の角川を調査し、順次、県内を４ブロックに分け、総合調査をすることになった。陸水が最も自然の変貌が激しく、河川を中心に多くの会員が参加でき、１年で一定のデータを出せるとメリットがあると意見があった。本年まで９回になるが県内の地域について河川を核とした総合調査を行うことで富山の自然の記録を残し、刻々変化する自然を記録し、ヒトと自然とのかかわりを総合的に考える視点、提言を与えるという意味でもきわめて重要であったといえる。また同じ目標に向かって共同で調査をすることにより、会員相互の連携もさらに深まったといえる。そして調査は個々の会員の蓄えた記録を活字に残し、大変貴重なデータも有効に活用されるものとなったといえよう。

この90年余りの生物相を含めた自然の変化は著しく変化してきており、富山という共通の自然をいろいろな角度から研究し、研究者同士が交流する必要があると思われる。一般に「生理学会」、「遺伝学会」、「発生学会」、「生態学会」、「分類学会」などの学会の他、「昆虫学会」、「魚類学会」、「貝類学会」、「藻類学会」、「シダ学会」などの材料ごとの学会がある。広い意味では富山の自然という共同の「材料」も学会成立の契機となる。すなわち、「富山学」、「富山生物学」、「富山自然学」という集まりがあって良いと思われる。

今後の発展には一人ひとりの会員が入っていた良かったと思われる収穫を保証するとともに、遠くを見据えて、学問の世界や自然の状況、社会の動向を考えていく必要がある。一方、若い会員が入らないと会に未来はない。若い人と「ベテラン」との交流が盛んに行われることが必要であり、魅力ある会にする必要がある。また、大学、研究所、博物館、試験場の連携を強めつつ、ひとりひとりの会員が大切にされる活動を目指していかなくてはならないと思う。